

博士論文（要約）

4歳児クラスの集まりの時間における幼児と保育者の対話過程

宮本 雄太

本論文の目的は、集まりの時間における4歳児の幼児と保育者の言動の表出や変容について、発話特徴や対話構造に着目して検討することを通して、集まりの時間の幼児と保育者の対話過程を明らかにすることである。全4部9章からなる。

第I部では、本論文の問題と目的、方法に言及した。

第1章では、第1節で現代の幼児期から高校までの育ちの中で、個と集団それぞれで求められている資質・能力を検討し、幼児教育・保育に必要とされる育ちを論じた。その上で、幼児教育・保育での個と集団の育ちに関する国定カリキュラムの位置づけの変遷を検討し、幼児教育・保育における集団活動の視点を整理した。第2節では、1)幼児期の“集団”に関する研究動向を観点別に整理して、7つの特徴を導出した。その中では、集団の多義性が明らかになったとともに、クラス集団の動態を明らかにするには活動場面と参加者の要因を組み合わせた検討が重要である点を示した。この点を踏まえ、以下の2)から5)では、集まりの時間に関する本研究の研究観点を整理した。2)集まりの時間の日常的な活動では、“ゲーム遊び場面”“話し合い場面”“絵本場面”の3場面を検討することの意義と先行研究を整理した。3)集まりの時間の非日常的な活動では、“運動会”“生活発表会”という日常生活と行事のつながり強い2場面を取り上げることの意義と先行研究を整理した。4)集まりの時間において障害者を中心としたクラスの変化を捉えることの意義と先行研究を整理した。5)集まりの時間において4歳児の集団を捉えることの意義に言及した。以上の観点を踏まえて、第3節では、集まりの時間を検討する際の分析枠組みと分析視点を提示し、第4節で本研究の課題と構成をまとめた。第5節では、先行研究の課題を踏まえて、本論文で扱う研究課題を整理した。第6節では、本論文の全体像を示した。

第2章では、本論文の2つの観察及び分析方法を述べた。第一に、A園では、201x年5月～3月に幼稚園4歳児クラスの集まりの時間の日常的な活動を週に1～3度観察し、46日分のデータを収集した。その中で、“ゲーム遊び場面”“話し合い場面”“絵本場面”“障害児”の4観点について事例分析を行った。第二に、A園と同系列のB園では、201y年度の4歳児の集まりの時間の非日常的な活動に関して、9月の運動会と2月の生活発表会を取り上げた。運動会は行事前の3週間(計15日)の毎日5～10分の対話を、生活発表会は行事前の1ヶ月(計21日)の毎日5～30分の対話を収集した。そして、2つの行事の対話分析を行った。

第II部では、集まりの時間の日常的な活動に着目して、保育者の関わりや意識と、4歳児の幼児同士関わりの表出や変容を検討した。

第3章では、集まりの時間の保育者の関わりを検討した。第一に、関わりの実

態に関して、期別、場面別で関わりの特徴数を量的に分析した。結果、期別、場面別ともに「雰囲気づくり」「クラスに生じる混乱への対応」「幼児の視点」「基本的生活習慣の獲得」は3期を通して多いという、保育者の関わりの実態の傾向が示された。第二に、活動への意識に関して、期別に関わりの特徴の自己評定を分析した。結果、「雰囲気作り」と「基本的生活習慣や決まりの獲得」が高く、関わりの実態との類似性が示された一方で、「幼児の視点への配慮」と「クラスに生じる混乱への対応」は最も低い評価となり、関わりの実態と意識との違いが示された。この違いの要因を検討するために、保育者の期別の語りを質的に分析したところ、違いが見られた2項目はともに保育者自身が手ごたえを実践の中で感じながらも、うまくいかない戸惑いが影響していることが明らかになった。

第4章では、4名の保育者による集まりの時間の自己評定を期別、場面別の観点から量的に検討した。結果、保育者は、幼児が集まりの時間に主体的に参加する姿勢を意識している点が示された。しかし、問題行動への意識や対話を開かれたものにする事への意識は、保育者によって個人差がみられた。これらの点から、同一理念の中で保育をするがゆえに共通の視点が生じる一方で、同一理念が影響を与えない保育者固有の保育観が違いとして生じている可能性が示唆された。次に、集まりの時間において保育者が共通点に意識する、幼児の主体的な参加に関する語りを質的に検討した。結果、保育者は3場面ともにクラス運営の観点から活動を主導しがちになるが、幼児の表現や参加姿勢に保育者が心を動かされながら巻き込まれることで、活動に対する保育者の見え方が変容する過程が共通して示された。

第5章では、集まりの時間の日常的な活動から、①“ゲーム遊び場面”②“話し合い場面”③“絵本場面”の3場面における幼児と保育者の関わりにみられる参加過程を検討した。全場面において、1)幼児の発話特徴を分類し、量的に検討した。また、2)幼児同士の対話が中心的な場面の中で、期別にどのようなやり取りが幼児間でなされているのかに着目をして、幼児や保育者の発話の対話構造を質的に分析した。①“ゲーム遊び場面”では、1)幼児の発話特徴は、単純応答に基づく[自分-活動]の関係の中でやりとりを楽しむ1期、活動を理解し始め[自分-活動-他児]といった関係の広がりの中で思いを主張しあう2期、[自分-活動-他児]の関係が深まる中でルールを取り入れて活動をより体系化しあう3期という特徴が示された。2)幼児間の対話では、1期は正解を当てることよりもいかに自分が該当しているかが意識されているといった[自分-活動]の具体的な内容が示された。2期では[自分-活動-他児]の関係の中で、生活経験や“常

識”のすり合わせがなされていた。そして、3期では[自分－活動－他児]のやりとりのより長期的な振り返りの中で、生活経験と活動の往還がなされていることが明らかになった。②“話し合い場面”では、一年を通して「集団内の会話と間接的集団の越境」「集団内・集団相互の会話と直接的集団の越境」「集団内・集団相互の会話と間接的集団の越境」という3つの対話構造の特徴がみられた。行為連鎖数の観点から検討すると、幼児同士の対話は、集団を越えることで言動機能や行為連鎖が増えていくことが示唆された。次に、それぞれの対話構造の事例を質的に検討したところ、合意形成に向けた対話内で雑談が全場面に共通して見られた。この幼児の雑談は、最終的に合意形成に向けた主題に着地する展開が共通してみられており、大人の想定を超えた幼児なりの対話展開がある点が示唆された。③“絵本場面”では、絵本を通して幼児同士の対話を促す“絵本の読み合い対話”という活動に着目して、幼児の参加姿勢と保育者の関わりの検討を行った。結果、絵本を通じた対話は、幼児の絵本世界の捉え直しや幼児の生活経験との対応関係を深めている点が明らかになった。特に、保育者の閉じた問いかけよりも開かれた問いかけを幼児に提示する場合に、幼児の発話連鎖が多くみられるなど、幼児同士の対話展開と保育者の援助の関係が示された。ただし、保育者による抽象的な問いかけは、幼児の発話連鎖が生じにくい身体動作を用いた同調表現がなされやすい点が明らかになった。

第6章では、障害児を中心とした集まりの時間での幼児間のやりとりの変容過程を期別に検討した。結果、関わりの特徴の量的な検討及び対話の質的な検討において、ともに「他児との関係を模索する」1期、「視野や関係が広がる」2期、「関係が変容する」3期という特徴が示された。障害児においても、他児との関係性の中でクラスの自分の居場所を構築しており、幼児同士の育ち合いは障害の有無に関わらず生じていることが明らかになった。

第Ⅲ部では、集まりの時間の非日常的な活動として行事に着目して、幼児と保育者の関わりの表出及び保育者の省察について検討した。

第7章では、「運動会」と「生活発表会」の2つの行事を検討した。第一に、「運動会」では、繰り返し活動を経験し、勝敗から勝ち方へのこだわりに向かう中で、想像性、創造性、実行力を引き出していることが示唆された。第二に、「生活発表会」では、自分たちだけの話を作るための合意形成過程に不和が生じるが、不和をすり合わせることで話のイメージが共有化されていく過程が示された。幼児同士の対話に基づく展開を構築するのは共有化が大きく、共有化は家庭での対話にもつながっていることが保護者の語りから示された。以上、幼児の主体的な参画

や共有化の過程の重要性が行事での微視的検討によって示された。

第Ⅳ部では、第Ⅱ部と第Ⅲ部で示された集まりの時間での対話の特徴を総括し、第8章の総合考察とした。本論文は、集まりの時間での保育者の関わりの実態と活動への意識と、幼児同士の関わりに基づく対話場面を微視的に検討した。そして、保育者主導の活動と見られがちな集まりの時間に内包される幼児の表現や対話の複雑かつ多様な特徴は、幼児の経験の共有や保育者の援助の中で構成されている点が明らかになった。これらの点は、本論文の独自性や意義である。この知見は、保育学、社会学、言語学、発達研究といった領域の関連の中で得た知見であり、従来の保育学研究に新たな学術的知見を導出したといえる。

今後の課題は、第一に、発達研究との関係で、4歳児の言語的発達の特質から身体動作に基づく表現行為の重要性を集まりの時間の中で検討する必要がある。第二に、施設形態の違いやクラス人数の違いは、社会文化的な文脈の違いを生じる点が考えられるため、多様な施設形態の園間の比較検討を行う必要がある。第三に、幼児期の発達の連続性の中で集まりの時間を検討する必要がある。